論文要旨

１．研究目的

本論文の目的は、モンゴル国の政治経済体制の移行を切り口に、次の三点を明らかにすることにある。第一に、体制移行前後の家族の変容に関する家族社会学的研究として、1921 年に始まった 70 年間の社会主義時代、1989 年のソ連崩壊にともなう民主化への移行、1992 年に始まる民主主義時代、これら時代を経験して形成された都市家族に着目し、モンゴルの社会主義時代と民主主義時代の家族の特徴、ならびにその生成要因を明らかにする。第二に、日本とは異なる牧畜・遊牧という生業形態を持ち、社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への移行という異なるイデオロギーと経済システムを経験した北東アジア国家の都市家族の変容理論を構築する。第三に、「近代家族」とそれに次いで現れるとされる「個人化する家族」への傾向を参考にしながら、かつて遊牧社会の中で作られた家族が、社会主義時代を経て、民主主義と資本主義という新しい主義・体制の中に生きる者としての 21 世紀における家族のあり方を展望して、北東アジアにおける家族変動を貫く理論を探求する。

２．分析方法、分析枠組み

本論文は落合が『21 世紀家族へ』で示した近代家族の 8 つの特徴を仮説として、それぞれの仮説を社会主義時代、民主主義時代に分けて検証する。検証にあたっては、筆者独自のアンケート調査、聞き取り調査の結果や観察調査で見た現実、そして収集した資料、統計資料と公式ホームページ上のモンゴル国や国際機関の統計データを用いた。

落合恵美子が示した近代家族の 8 つの特徴とは次の通りである。

① 家内領域と公共領域の分離
② 家族成員相互の強い情緒的関係
③ 子ども中心主義
④ 男は公共領域・女は家内領域という性別役割分業
⑤ 家族の集団性の強化
⑥ 社交の衰退とプライバシーの成立
⑦ 非親族の排除
⑧ 核家族

分析に当たり、「⑥社交の衰退とプライバシーの成立」、「⑦非親族の排除」と「⑧核家族」は家族をめぐるネットワークに関わる問題であるので、本研究では社会ネットワークという章を設け、「社交の衰退とプライバシーの成立」、「非親族の排除」、「核家族」を検証した。したがって本研究では、上の 8 つの仮説モデルを、以下のような 6 つの章

に分けて分析を進めた。

① 家内領域と公共領域が分離されているかどうか

② 夫婦の役割分業は男が公共領域、女が家内領域という性別役割分業であるかどうか

③ 家族成員間は強い情緒的関係で結ばれているかどうか

④ 子ども中心主義であるかどうか

⑤ 家族の形態は核家族世帯で、非親族を排除し、社交が衰退しているかどうか

⑥ 家族の集団性が強いかどうか

３．論文構成

本研究は序章、本文の７章と終章、参考文献、付録から構成されている。

第一章では、家内領域と公共領域が分離されたかどうかを、住居空間構造の変化、生業と家庭との分離、国家の管理と家庭生活、この三つの面で検討した。社会主義時代に集合住宅に入った一部の人だけが空間的に外部から切り離された生活を営むようになったが、ゲルを単位に生活している家族は外部から分離できない状態にあった。生産、生業は家内領域から切り離され、全員が労働者になって、職場と生活の場が分離された。国家、政党の統制によって家族に対するイデオロギーの介入、家族への福祉政策を積極的に推進していた。民主主義時代には、集合住宅に住む人は家屋によって外部から切り離された状態にあるが、ゲル地区に住む人々はハシャーにより外部から切り離されている状態にある。社会主義の崩壊によって国家が福祉機能を放棄したため、本来言うところの家族の機能が各家族に戻り、つまり、「私」を「公」から分離した結果になった。本章の仮説となる「家内領域と公共領域の分離」は社会主義時代に形成されなかったが、民主主義時代に形成されたことが明らかになった。

第二章では、男は公共領域、女は家内領域という性別役割分業が形成されたかどうかを検討した。社会主義時代、民主主義時代の家族における役割分業意識を考察し、役割分業の実態の多様化を確認した。男は公共領域、女は家内領域という性別役割分業は社会主義時代にも、民主主義時代にもモンゴル国の都市家族の特徴ではなかった。それをもたらした原因を遊牧生活由来の役割分業、社会主義型役割分業、脱社会主義型役割分業と三つに分けて、モンゴル国の都市家族には、まだ歴史的生活と経験、そして牧畜という生業形態から抜け出していない部分があることを明らかにした。

第三章では、家族成員間が情緒的関係で結ばれているかどうかについて検証した。社会主義時代でも民主主義時代でも、夫婦間は情緒的関係を求めるが、近代家族の特徴の一つである「家族成員間は強い情緒的な関係で結ばれている」に属する夫婦間の絆に含まれている性、愛、生殖が結婚を通じて一体化するということは社会主義世代でも民主主義世代でもモンゴル人の規範意識にならなかったのである。本章の仮説である「家族成員間が情緒的関係で結ばれている」ことは、社会主義時代と民主主義時代いずれの時

代にも形成されなかったことを明らかにした。

第四章では、子ども中心主義を検証した。社会主義時代に、子どもは教育を受けて、正しく育てられる対象となった。国家と家庭が子どもを教育する、育てる役割をそれぞれ担った。親は子どもの公教育を国家に任せて仕事に専念し、子どもが親からは引き離されていたのであって、親の愛情を大きく受けることはなかったのである。社会主義が崩壊したことにより、子どもの教育と社会化の機能が家庭に戻ってきた。子どもは親との絆を深めることができるようになり、親は新しい時代における子どもの成長と発展をより重視して、子どもに愛情をたっぷり注ぎ込んでいる親が現れてきている。現在の民主主義時代モンゴルの都市家族には子ども中心主義の萌芽的状態にあるので、本章の仮説である「子ども中心主義」は、社会主義時代と民主主義時代いずれの時代にも家族の特徴ではないことを明らかにした。

第五章では家族をめぐる社会的ネットワークの変容を分析して、非親族の排除、核家族、社交の衰退を検証した。非親族の排除、核家族は社会主義時代以前のことであって、社会主義時代には核家族の志向があったが、家族成員以外の親族を受け入れることもあった。民主主義時代に入ると、家族以外の親族を世帯から排除するようになって、社会主義時代よりも核家族の志向が強まった。社会主義時代でも民主主義時代でも親子間・親戚間の互助関係は保たれていた。民主主義時代には近隣との社交は衰退したが親族との社交は衰退していないので、社交の衰退が民主主義時代の家族の特徴ではない。本章の仮説である「非親族の排除」、「核家族」が社会主義時代と民主主義時代いずれの時代でも都市家族の特徴である。「社交の衰退」は社会主義時代の家族には現れなかったが、民主主義時代に現れた現象であることを明らかにした。

第六章では、家族の集団性が強化されているかどうかを検証した。家族という集団に対する考え、家族とその中の個人に対する考え、家族の集団性の具体的な行動である家族行動、家族成員の情緒的サポートなどを分析して、社会主義時代から民主主義時代への変容過程で家族の集団性が強化していることを明らかにした。家族の集団性の強化は社会主義時代でも民主主義時代でもモンゴルの家族の特徴であるとの見解に達した。また家族の集団性が崩壊して個人化へ進むかどうかを検証し、個人の生きがいを重視することとは、あくまでも家族を大事にすることを前提としている見解に達した。

第七章では、再び本研究の仮説が社会主義時代、民主主義時代で形成されたかどうかと検証をまとめ、社会主義時代、民主主義時代に形成された家族のそれぞれの特徴を明らかにし、家族が個人化へ進むかどうかを再検討した。「近代家族」とそれにつづくとされる「個人化する家族」という推移はモンゴルでは成立していないことを指摘した。これは、モンゴルが社会主義時代と民主主義時代への移行を経験したことに起因していることを明らかにした。また仮説の中の成り立った項目と成り立たなかった項目に分けて、その生成要因を考察して、そして 21 世紀の家族の特徴を予測した。社会主義から

民主主義への体制移行を経験した国家の、民主主義的 21 世紀家族は、従来の近代家族論が明らかにしてきた「近代家族」の特徴を備えるが、それは落合の「近代家族論」でいう一時的、歴史的に表れる特徴ではなく、社会主義時代と民主主義時代の歴史の各段階で徐々に形成され、21 世紀に入って「近代家族」の特徴を表すものである。

終章では、全論文の内容を総括して、北東アジアにおける家族変動の一端、即ち社会主義近代化と都市化、脱社会主義化を経験した牧民社会における都市家族の変動理論を提出した。その内容は、社会主義的近代家族、民主主義的近代家族、そして将来の21世紀家族は「個人化する家族」の一部の特徴を含みつつ、それらが漸進的に強化されながら、徐々に本論文の仮説である近代家族の特徴を表す家族へ変容する。この一連のプロセスは、繰り返しになるが、従来展開されてきた近代家族に関する研究結果と正反対の結果となるのである。さらにモンゴルの現在の都市社会に現れた、以上の諸特徴を含んだ家族は歴史的なもので、時代とともに変容しつつあるものでもある。家族は崩壊するのではない。社会主義的近代家族は社会主義時代のイデオロギーによって作られたものである。そのように強制的に作られた家族が民主主義時代になって変容し、遊牧生活で生まれたモンゴル人の根強い意識が再び復活して、新しい形態を作り続けることを明らかにした。

論文の最後ではアンケート調査の質問項目の翻訳、聞き取り調査の質問項目の翻訳、モンゴル国、ウランバートル市の地図と参考文献を付録した。